

## 健康平和研究

### 17年第2章 健康とTQ

美しい 1 ひろさ深さ 1 未発達 5 生理的  
土台 8 特異装置 10

17年4月17日号より

(や=山田 学) [☆☆☆美しい☆☆☆浅田真央さん、美しいスケートをありがとうございました。そして10年余り、日本と世界の女子フィギュアを牽引した重圧を、ありがとうございました。いさぎよい引退決断も、後輩選手たちのためになつたと思ひます。]

17.7.18より

(や) [☆☆☆ひろさ深さ☆☆☆わたしは今、あらためて、ヨガの沖 正弘師の著作を真剣に学び直してをります。そのひろさ深さを自覚し直してをります。]

(沖 正弘『ヨガ総合健康法沖ヨガの考え方と修行法(上)』地産出版1976年・1～2ページより) [ところが現在、健康という言葉の意味が非常に誤解されており、多くの人は病気をしないこと、俗に丈夫と思われている状態を健康と思いこんでいるが、これはまちがいである。人間の健康とは機械的な強さではなくて、防衛能力、回復能力、適応能力が高いこと、すなわち正しく感じ、判断し、処理できる自然性、つまりバランスのとれている状態を常時維持回復できる能力

が高いことである。普通そうだと信じこまれている健康状態は、実は異常を感じる能力を失調している状態であり、働きがマヒしている状態であって、この状態が慢性病や成人病の原因になり、半病人半健康の状態をもつくりだすのである。けが以外の異常状態になるためには、相当に時間がかかっているわけだが、神経がマヒしているために、異常回復の働きをもつ病的症状が出ないのである。]

(同39～40ページより) [多くの人は、ある一つの方法や部分的な物で健康を保ち高めることができたり、病を治せるのだと信じているが、これはたいへんな誤りである。生命は全体的総合的かつ流動的な働きであるから、心身および生活の中に存在するすべての刺激が必要で、部分的な物や方法、たとえば体操だけで、食物だけで、または心の修養だけで、心身を健康にすることはできない。

治病法やその原因についても、一つか二つの物が原因であり、またその解決の方法であるかのように簡単に考えている人が多いが、これは誤りであるから正解は得られないし、救われもしないであろう。たとえ理論的には正しいものであっても、部分だけを行なうとかたよることになるのである。ある食物の持っている成分がその栄養価と力を発揮できるためには、これに協力する運動と呼吸と心が必要である。薬だけでは

薬効は生じない。薬効発揮にはこのことに協力できる食物、心、体の働きが必要である。同じように、ある体操や食事法を行なうだけで、心身の異常が是正、改造される、または健康が増進できると思うのは誤りで、これはヨガの考え方でもまた行ない方でもないのである。原因も方法も一人一様であり全体的でなければいけないという観点から、心のコントロールと浄化法、体の訓練法のすべて、栄養と生活是正法の全部をあわせて行なうのが、ヨガの行ない方である。]

(同71ページより) [姿勢にゆがみがあると、正しい動作ができないだけでなく、呼吸と感じ方が異常になり、このために食欲求も異常になり、バランスをとるのが弱いために、抵抗力も適応力も弱くなる。片方だけを使ったから体がかたよるなどということはあり得ない。右手を使うときには左手の協力が必要であり、指一本動かすのも起動点は腰からであり、それに全身が協力するのが体のしくみである。

自然体とは各部分が独立性を保ちながら全体として協力しあっていることであるから、手足の十指は、それぞれ独立した一指として使うことが肝要。とくに親指と小指が互角に協力し合わないと、自律神経の働きがアンバランスになる。それは副交感神経が親指に、交感神経が小指に関係しているからである。

また筋肉の伸び縮みの力の差、呼吸力の差、血液の酸・アルカリのアンバランス、ホルモンと神経のアンバランスが感じ方を異常にし、心身の働きを異常にするのである。]

(同 79 ペより) [沖ヨガでは、禅の呼吸は笑いの呼吸に精神統一を加えたものであると教えている。息を早く吸うと、筋肉が硬くなり緊張する。驚きの例がこれである。息を止めると腰腹部の力が強まり力が出る。これが呼吸のリズムである。]

(同 84 ~ 85 ペより) [これらのことから、姿勢の異常が体操や整体法や指圧などで治るというのは、あまりにも単純すぎる誤解であることに気づかれたことと思う。頭を支えているものは、首の骨の力だけではない。立つことを保っているものは、足の力だけではない。つい骨は、鎖であって柱ではない。その証拠に、ガッカリすると頭を支えられなくなり、ビックリすると立っておられなくなり、決心すると立つ力が強くなり、希望にかがやくとピンと首に力が入ってくる。内を整えないと形も整わないし、形が狂うと内も狂ってくるのだという心身一如の真理を自覚してほしい。]

(や) [ほんたうの保健こそは、しだいしだいに、人間社会のその総体を修正してゆく。これが、わたしが最近、考へはじめてゐることです。

生活とは、一瞬一瞬の、姿勢動作です。呼吸です。食事と排泄です。人間関係とくに異性

関係です。精神です。そして、生活環境です。健康平和な、それらとは、どういふものか。おたがひ、自分に正直に、健康平和を、追求しあふ。人間は本来、健康平和を好みます。ですから、一瞬一瞬の、追求と修正といふものが、痛快そのものなのです。

すると、しだいに、気づきます。今の人間社会が、病的戦争な、架空の認識、これに満ち満ちてゐると。

資産を増殖する闘争。それにとらはれてゐるからです。学問が、生命体の主体性や、人間個人の主体性、これを見失つてゐるからです。]

17.6.15.より

(や)[☆☆☆未発達☆☆☆最近のわたしは、ある必要もあり、生理学関連の研究にかなり集中してをります。あらためて、わたしの基礎認識を記します。

\*  
生命は生命体といふ主体における代謝過程です。

遺伝配列 (DNA における塩基の配列) は、生存環境に適応する形態において、代謝過程に反映します。

今の (ひろい意味の) 生理学は、〈代謝 (同化と異化) による環境への適応〉といふ生理本質を、失念してはゐないか。

そして、地球表面の物理にもとづく、生物系進化を、生理として、どう理解しうるか。

\*

以前から関心があつたが、恥しながら、まともに読み込む機会を得なかつたものとして、西原克成先生の著作群があります。この度、その代表的な 1 冊について、わたしの今の実力の範囲において、精読することができました。その終章に重要な指摘がありますから、引用させていただきます。]

(西原克成『生命記憶を探る旅三木成夫を読み解く』河出書房新社 2016 年・230 ~ 231 ペより) [残念ながら、いま、世界じゅうでもっとも「難病」の多いのがわが国です。そして、「難病」とは、再三再四述べてきたように、腸内に常在するほとんど無害なばい菌やウイルスによって汚染された「白血球」(顆粒球) によって運ばれた微生物が、からだじゅうの器官や組織、細胞群の細胞膜内に入り込んで「細胞内感染症」を発症したものの。細胞内のミトコンドリアのはたらきがだめになってしまい、起こった病気のことです。

ばい菌やウイルスは、当然それぞれに小さな輪になった DNA 遺伝子をもっています。そして、ひとたび細胞に入ると、この小さな DNA 遺伝子が細胞の染色体にある「核遺伝子」のなかからめ取られて「ジャンクゲノム」になってしまうのです。冷血動物は、このような、ヒトを含む哺乳動物の 30 倍もの大きさをもつゲノム、「ジャンクゲノム」を大量にもっています。

「難病」がこのように多発する日本において、難病患者たちの体内では、腸内に常在する微生物が大量にからだじゅうを巡り、多くの臓器の細胞群が「細胞内感染症」を起こし、その多くが冷血動物と同様に「ジャンクゲノム」を抱えてしまっているのです。

てっとり早く言えば、わが国では、「ジャンクゲノム」をたくさん抱えた冷血動物型の「劣化した新人類」がたくさん誕生しているのです。世界でもっとも悪いほうへ、つまり「退行進化」がいちばん進んでいるのが日本なのかもしれません。]

(同 234 ~ 235 ペより) [本書の読者諸賢には、本文を再読三読し、現在のような「絶滅」に向かうだけの「でたらめ医学」とそれに基づいて田中角栄が制度化した、でたらめな「難病医療救済制度」になじみ、疑いももたずにいるこの国を正しい医学の軌道に戻してほしい。日本を、穏やかで、確実に健康生活が維持される、「いのちに至る道」、「発展への進化の道」に戻す努力をはじめてほしいのです。

それには、まず子育てを、40年前まで日本でおこなわれていた伝統的な育児法に戻すとともに、子どもも大人もなく、生き方・暮らし方を、ともに60年前のそれに返し、人の道を宗教のごとく正さねばなりません。具体的には、前述した「七つのいましめ」に従えばいいだけのことです。

これによって、はじめて「三木形態学」が展開した、「生のリズム」と「宇宙のリズム」が調和した「エネルギーにめざめた生き方」をすることができるようになるのです。

今日、日本は「平均寿命」も「健康寿命」も最高の、世界に冠たる「長寿国」になりました。しかし、その一方で、老若男女を問わず、「半病人」と「難病患者」が満ちあふれ、赤ちゃんや幼児、学童から青少年、壮年層に至るまでが、幸福感の乏しい、不健康な「よらよらの国民」が多すぎます。これではだめなのです。

さあみなさん、宇宙にあまねく行き渡っている、さまざまな「はたらき」をもった「からだによいエネルギー」と、悪いそれに目覚めましょう。こうしたエネルギーに目覚め、「万物の長」としての誇りをもって、新しい人の道を打ちたてましょう。

これこそが、「生のリズム」と「宇宙のリズム」が調和した、「健康進化」、「発展進化」への道なのです。]

(や) 人間は、保健が必要な、生物です。

が、今の人間社会において、とくに日本社会において、〈健康平和な現実認識の保健論〉が、残念ながら、未発達です。]

17.5.15より

(や) [☆☆☆生理的土台☆☆☆諸民族調和への道の重要部分として、少しずつ、少しずつ

つ、〈諸宗教の起源と進展の必然〉について、理解を深めあつていくことも必須です。意外な分野の著作に、とても興味深い指摘がありましたから、引用させていただきます。「寄生虫博士」として有名な藤田紘一郎先生の『腸内細菌と共に生きる免疫力を高める腸の中の居候』(技術評論社2015年)からです。]

(『腸内細菌と共に生きる』84 ~ 85 ペより) [... イスラム教では豚を食べることはタブーですが、これは豚の中に棲んでいる有鉤条虫ゆうこうというサナダムシが人の体に入ってくると非常に怖いからです。意外に思う人も多いかもしれませんが、イスラム教が豚をタブーにしたのは、イスラム教が普及した国や地域には、この有鉤条虫がいっぱいいいたからです。面白いことに、虫の生息地域とイスラム教の普及したエリアは見事に重なっています。怖い寄生虫をもっているものはタブーにしちゃおう、ということにしたのです。

同様に、ヒンドゥー教がさかんだったインドでは、マラリアにかかる人が多くいました。マラリア蚊は人にも吸血しますが、本当は牛のほうが好きなのです。だから、牛がいると人はマラリアにかかりにくいだろうということで、ヒンドゥー教は牛を大事にしたのです。イスラム教は豚を避け、ヒンドゥー教は牛を受け入れました。

やっていることは逆のように映りますが、病気にかからないようにするという知恵の

部分、発想はまったく一緒だったのです。  
その意味では、寄生虫は宗教にも深い関係  
があると言えるかもしれません。]

(や) [諸宗教を人間の生理的な土台から考へ  
ることも必要である、といふことなのでせう  
か。]

17.11.15より

(や) [☆☆特異装置☆☆わたしどもが  
扱ふ「TQ 技術」について、質問がありました  
から、お答へします。]

(質問) [〈TQ 処理〉した金属 (マドラーな  
ど) を、他の固体 (ガラスや陶磁器や金属  
など) に、長時間、接触させておくのみで、  
他の固体も、〈TQ 処理〉されたやうな状態  
に、なりませんか?]

(や) [さういふ簡易な現象があるのなら、わ  
が TQ 技術は、“驚異のひろがり方”もする  
のでせうが、さういふ現象は、まったくあり  
えません。

わが TQ 技術は、そんな安易な技術でありま  
せん。TQ 技術の核心工程を、〈TQ 処理〉と  
呼び、特異な物理的装置 (事業機密) が  
ないと、この工程は、まったく発生し  
ません。また、TQ 技術は、物理学の  
技術であり、化学の技術ではありません。  
対象の化学的成分は、TQ 技術とは、  
無関係です。

たとへば、工業的に精製した食塩 (ほとん  
ど NaCl) と、海水を天日干した天然食  
塩は、化学的成分が、異なります。

が、さういふ化学的成分の相異は、TQ 技  
術とは、無関係です。

わたしどもは以前、入手しやすいといふ理  
由により、前者の精製食塩に対し、先の特  
異装置を用ひ、〈TQ 処理〉を実施して  
みました。今は、後者の天然食塩を入手し、  
それに対し、同じく特異装置を用ひ、  
〈TQ 処理〉を実施して

みます。  
〈TQ 処理〉を実施しても、対象の化学的  
成分は一切、変化しません。が、生理の本  
質に近い物性 (物理的な性質) たる、  
〈生命促進性〉 (わたしどもの新造語) が、  
顕著に、変化しま

す。  
かういふ物性の変化が、〈TQ 処理〉の  
効果で

す。  
以前の精製食塩を対象とした〈TQ 処理〉  
でも、今の天然食塩を対象とした〈TQ 処  
理〉でも、結果は同じく、〈生命促進性〉  
の強さが +20 (自然界にて最高) とな  
ります。

が、両者の化学的成分の相異は、その  
ままで

す。  
先の質問は、〈TQ 処理〉といふ核心工  
程と、TQ 処理済材料を諸分野 (健康・住  
居・食物流通・農業・環境) に、適用す  
る過程を、混同することから、来て  
みます。したがって、後者を、〈TQ 適  
用〉と呼ぶことにしませう。

TQ 技術 = 〈TQ 処理〉 + 〈TQ 適用〉

〈TQ 処理〉 = (特異装置による) 物性加  
工技術 (〈生命促進性〉を加工する技術)

〈TQ 適用〉 = TQ 処理済材料を用ひた、  
空間

調整技術 (〈酵素活性場〉を調整する技  
術) 質問者は、〈TQ 適用〉の過程にて、  
機密の〈TQ 処理〉の工程まで、あつて  
ほしい ... と、淡い期待をいだかれた  
のでせうか。

なほ、研究前史に敬意を表すため、TQ 技  
術といふ名称のままにしておきます。T  
と Q は、それぞれ、化学的成分の名称  
から採りました。が、むしろ、それら  
の化学的成分そのものを、必要としな  
くなつた。化学の技術から、物理学の  
技術に、転化した。さういふところに、  
技術の本質があります。ですから、TQ  
技術といふ名称を用ひる、とともに、  
技術の本質は、むしろ、〈脱 TQ〉の  
技術なのです。]